

なぞり書きから視写へ —その認知的な背景と教材の工夫について—

北海道釧路養護学校・教頭・佐藤 暢洋

1 研究主題の設定理由

私たち指導者は子どもが文字を身に付けることを目的に、児童生徒の実態に応じつつ、段階的に指導に当たる。特別支援学校(知的障がい)の児童生徒の中には、図や文字のなぞり書きの段階にとどまり、手本を見ながら行う視写の学習へ進めずにいるものが見受けられる。そこで、なぞり書きと、視写のそれぞれの学習で必要とされる力を、認知面から整理するとともに、これらの段階の児童生徒を想定した視知覚教材を作成しようと考えた。

2 研究内容・方法と経過

(1) 概要

書字には総合的な視知覚 1)の力が必要とされる。視写は、なぞり書きで必要とされる視知覚的技能に加え、空間関係に関する力が必要とされる。

また、文字から一時的に目を離し、短期的に記憶した後に書き写すことで、記憶が定着する 2)ことから考えると、なぞり書きよりも視写、空書等が効果的であると言える。これらのことから、文字の定着には、なぞり書きから視写の学習への移行が必要である。

(2) ひらがなの書字のレディネスについて

三好(1994)3)は、ひらがなの書字に当たって、フロスティック視知覚発達検査(以下DTVP)の、五つの視知覚的技能の中の、1. 視覚と運動の供応、2. 図形と素地、5. 空間関係の三つが重要であるとした。そして、DTVPでの知覚年齢(PA)が、それぞれ4歳半から5歳程度の発達が必要とした。

(3) なぞり書きについて

なぞり書きには、①図(図形や文字など)を地から弁別し、認識する力、②視覚により手の動きを制御する力などが必要とされる。①は、DTVPにおける視覚的技能「1. 視覚と運動」に、②は同じく「2. 図形と素地」に当たる。

(4) 視写について

視写においては、なぞり書きで必要とされた二つの視知覚的技能に加え、自分と他の二つ以上のものの位置関係や、もの同士の位置関係を理解する空間的な能力が必要となる。例えば、特別支援学校(知的障がい)の生徒が、手本の図の模様を見ながら、ビーズで作品を作る様子を思い浮かべてもらいたい。さらに、私たちがテレビで囲碁の対局を見ながら、手元の碁盤に再現するのも同様である。これらの力は、DTVPの視覚的技能における「5. 空間関係」に当たる。

(5) 文字の定着について

文字などを記憶に定着させるには、いったん対象から目を離し、一時的に頭の中に記憶する作業(短期記憶)が必要となる 2)。この点から、文字の記憶への定着は、なぞり書

きよりも、手本と見比べながら行う視写、手本を見た後いったん記憶にとどめ書き写す練習や空書などがより効果的と言える。

(6) 空間関係の視知覚的技能の向上について

ア 空間関係の力の基礎は、自分を中心とした空間的な理解力(自分の前後、左右、上下)である。これは、DTVP の視覚的スキルにおける「4. 空間における位置」に当たる。

イ フロスティング視知覚能力促進法では、「二次元の平面(紙面)上に示された記号や絵を正確に知覚する能力は、三次元の事物や事物の相互関係の知覚を学習した後に発達する。」と指摘している。つまり、自分の身体各部の名称を理解しその位置を指さしたり、自分を中心とした前後左右上下を理解したり、指示により前後左右に移動できたり、トレーを本人の前に立てるように提示し、その左右、上下を答えたり(以上空間における位置の学習)、4×4等に仕切ったオセロの盤の駒の配置を、もう一つの盤に再現したりする(空間関係の学習)などの学習である。

プリント教材を用いた学習はこれらの学習の後、若しくは並行して行う必要がある。

(7) 教材の作成に当たって

橋詰は「漢字が書けない原因の類型と対策(試案)」4)のまとめで、以下の指摘をしている。(抜粋)

- ・なぜ漢字が書けないのか、原因を探る。(心理検査、聞き取り、試行)
- ・一つの方法がだめでも他のいろいろな方法を試す。新方法を作る。
- ・絶対に何か良い方法があることを指導者が信じる。

これらは LD 児等へを対象とした漢字指導について書かれたものだが、知的障害を持つ子どもの指導に際しても、大切な示唆を与えてくれる。

(8) プリント教材の作成

空間関係に関する視知覚教材(図2)に取り組むことができない児童生徒を想定し、プリント教材を作成した。

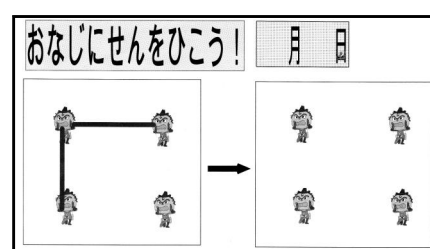
ア 空間の位置に関する教材の作成

(ア) 幾つかの図の中から図を回転させたものを答える教材。(図1)

(イ) 向きの違う四つの図から、手本の図と同じ向きの図を探す教材。



(図1)



(図2)

イ 空間関係に関する教材の作成

(ア) 手本を見て、横もしくは縦の二つのキャラクター結ぶ線を試写させる。その際、①補助線を入れる(図3)、②補助線の色を薄くする、③補助線をなくする(図4)の3段階に変化させて教材を作成する。

(イ) キャラクターを3個に増やし、補助線を(ア)と同様に
変化させて教材を作成する。(図5)

(ウ) (イ)の図に斜めの線を加える。(図6)

(エ) キャラクターを4個にして(図2)、縦線、横線、斜
め線、L字線 等について、補助線を3段階に変化させ
て教材を作成する。

3 研究成果・考察

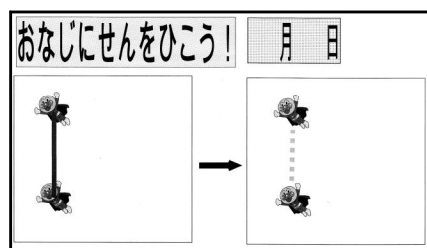
空間関係の教材(図2)が行えない特別支援学校(知的障
がい)小学部1年生のAさんに、これらの教材を試みると、
大好きなアンパンマンのキャラクターを用いたこともあり、
意欲的に取り組むことができた。1回に2～4枚程度
の教材を実施し、時間は5分前後である。空間の位置に関
する(図1)の教材は2回行ったが、正答率25%程度で、
まだ、理解に至っていないようである。もう少し続けて実
態を知る必要がある。空間関係についての教材は、キャラ
クター2個をつなぐ教材(図3)、(図4)と、三つのキャラ
クターの内二つを結ぶ線を書く教材(図5)は、補助線のな
いものも自分で行うことができた。

今後斜めの線を入れたり、複数の線を用いたり、キャラ
クターの数を4個に増やす(図2)など、難易度を段階的に
高めた教材及び「1. 視覚と運動」「2. 図形と素地」の
教材も併せて実施していきたい。

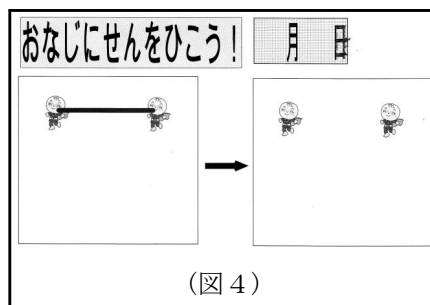
また、ボディイメージなどの空間的な理解についての実
態把握を行い、「(6) 空間関係の視知覚的技能の向上につ
いて」で触れたように、自分の身体を中心とした方向性や、
具体物を用いた空間関係に関する学習を工夫していくこと
も必要であろう。

引用・参考文献

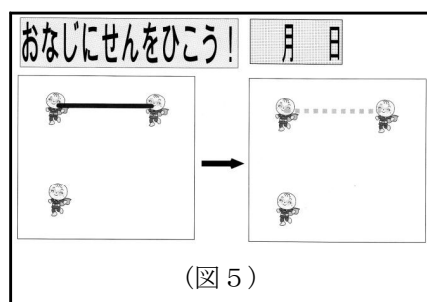
- 1) フロスティック視知覚能力促進法では視知覚を「視覚的刺激を認知して弁別し、それ
らの刺激を以前の経験と連合させて解釈する能力」としている。
- 2) 茂木健一郎「脳を生かす勉強法」P86-88
- 3) 三好好文 特殊教育学会研究 3(3)P39 - 43 1994
- 4) 橋詰郁郎 平成18年度上川地区特別支援教育研修会「視覚認知に課題を持つ子どもの
書字・読字指導の実際Ⅱ」



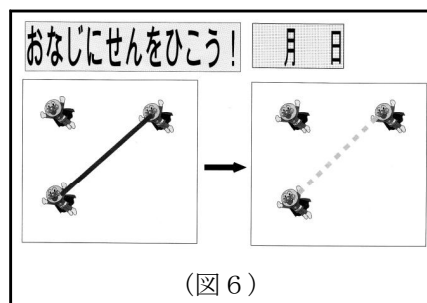
(図3)



(図4)



(図5)



(図6)